

■第二十三章 誤ち (errors 顛倒) の考察

煩惱 (ぼんのう) と過ちによって、我々人間は輪廻に縛りつけられている、これが仏教の教えである。では煩惱と過ちとは何か。

まず煩惱 defilements (汚れ) には三つある。欲望 desire (貪)、怒り／嫌悪 hatred (瞋)、そして無知／混乱 confusion (痴) である。これら三つは自己と世界への執着となって現れ、執着が煩惱を生み、煩惱が執着を生むというように循環増幅されて、我々を輪廻の世界に縛りつけるのである。

過ちは「四つの基本的過ち」the four basic errors とも、「間違った哲学的命題」erroneous philosophical theses とも呼ばれるが、1. 個人の集合体の中に永遠の自己が存在する、2. 輪廻界 (サンサーラ) には幸福が存在する、3. 肉体は幸福の源である、4. 集合体とは別に永遠の自己が存在する、という考えである。

1. については唯識の心 (アーラヤ識) や、ユングの「セルフ」、あるいは「ハイアーセルフ」などの概念を思い浮かべる人がいるかもしれないが、ここでの意味は、生きている自分の中にある絶対なる自己に執着するあり方のこと。2. は現世の幸福のみの追求、3. は肉体的・物質的快樂の追求、4. は靈魂不滅の思想によって現世で努力しない、という態度を招くものであり、それぞれ解脱を妨げて輪廻の世界に人間を縛りつける。

この章ではそうした煩惱と過ちが本質的な実体ではないということが論証される。実体なら永続するので、解脱 (悟り／涅槃) には永遠に到達できないことになってしまう。かといって過ちが存在しないなら――つまり実体の否定は「まったく存在しない」ということだが――なぜ我々が解脱できずに輪廻をさまよっているかが説明できなくなってしまう。煩惱や過ちが幻想に過ぎないなら、どうして輪廻の苦しみも幻想に過ぎないとして放っておけないのか不思議に思えてくる。ナーガールジュナはこうした問題について独特の否定論法で説明するのである。

1. 欲望、怒り／嫌悪、そして無知はすべて
思考 thought から生じる、と言われる
それらはすべて
快 the pleasant (浄)、不快 the unpleasant (不浄)、そして過ちに依存して
いる

1. 意識

欲望も怒りも無知もすべて、その対象をとらえる認識作用（思考）から生じてくるのだと言われる。したがって欲望・怒り・無知は、快・不快といった感覚－認知現象をもとにして、過った認識作用に依存して成立しているのである。

さらに言うならば、中観派では対象をすべて実体的にとらえ、暗黙のうちにそう想定することによって、つまり対象物がそのもの自身の性質を持っていると考えることによって、欲望や怒りなどが生じてくるということが念頭に置かれているのである。

2. 快や不快に依存するものは何であれ

本質を持って存在してはいないのであるから

煩惱 defilements は

実在的には really 存在しないのである

2. 意識

快や不快という感覚に依存して煩惱（欲望・怒り・無知）が成立しているのであるから、煩惱は何ものにも依存せず、それ自身の本質を持って存在しているものではないことになる。煩惱は実体的には存在しないのである。

実体的には (really) を「本当には」の意味に解すると虚無的な解釈になってくることに注意しなければならない。ナーガールジュナは煩惱が「まったく存在しない」と言っているわけではないのである。本質を持って実体的に存在しているわけではない、依存的に存在している、ということである。

3. 自己の実在 existence、あるいは非存在 nonexistence は

いかなる方法でも証明されなかった

その証明なくしていかに

煩惱の実在や非存在が証明され得るだろうか

3. 意識

前に行った分析で、自己が実体的に存在することも、まったく存在しないものであることも、どうやっても証明できないものであることがわかっているはずである。したがってその証明ができないのに、煩悩が実体的に存在しているとか、まったく存在していないとかいうことが証明できるだろうか。

煩悩は、「自己の」煩悩だからである。このことは次の詩で言及される：

4. 煩悩は誰かのものである

しかしその当人の実在は証明されていない

そのように煩悩の所有者がないのであれば

煩悩は誰のものでもない

4. 意識

(なぜなら煩悩というものは単独で存在するのではなく、誰かの煩悩として存在するもののはずだからである。これについてはあなたがたも、) 煩悩は誰かのものである(と主張している)。しかし、その当人の実体性は証明できないのである。(自己の非実体性はすでに証明されている。)つまり所有者がまったく存在しない—実体の否定は「まったく存在しない」である—のであれば、煩悩は所有者なく存在していることになってしまう。

一行目を反論者の主張だと解釈する例があるので、上記のように括弧内にその意味を含めて意識しておいた。

5. あなたがたが自分自身を見るように煩悩 defilements を見よ

それらは五つの分析 fivefold way で言われる煩悩を持つもの defiled の中には
ない

あなたがたが自分自身を見るように煩悩を持つものを見よ

それは五つの分析で言われる煩悩の中にはない

5. 意識

あなたがたが自分自身を見るときのように、煩惱も見なければならない。煩惱は、先に論議した「五つの分析」¹ に登場する自己（煩惱の所有者）の中に存在するものではない。同様に、あなたがたが自分自身を見るときのように、煩惱を持つ者も見なければならない。自己（煩惱を持つ者）も、「五つの分析」に登場する煩惱の中に存在するものではない。

集合体との関係から見た自己の無実体性についての分析は、そのまま煩惱の無実体性についての分析にもあてはまるのである。

6. 快（浄）、不快（不浄）、そして過ちは
本質を持って存在してはいない
いかなる快、不快、そして過ちが
煩惱を依存成立させることができるだろうか

6. 意識

快・不快などの感覚も、実体的に自己をとらえる過ちも、それ自身の本質を持って存在するようなものではない。それらのものは、煩惱を成立させる根拠として実体的に存在しているわけではないのである。

7. 形 form（色）、音 sound（声）、味 taste（味）、触感 touch（触）、
匂い smell（香）、そして事物の概念 concepts of things という：
これら六つは
欲望、怒り／嫌悪、そして無知の
根拠として考えられている

1. 前章に登場した分析である： 自己と集合体は同一の実体でもなく、別の実体でもない。集合体は自己の中に独立して存在しておらず、自己も集合体の中に独立して存在していない。自己と集合体は依存し合うものである。

8. 形、音、味、触感、
匂い、そして事物の概念という： これら六つは
ガンダルヴァ Gandharvas（乾闥婆）の都市のようなものとして
また、夢か蜃気楼のようなものとしてのみ理解されるべきである

7. 8. 意識

五感（視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚、もしくはその対象）と、概念的認識作用（もしくは概念そのもの）の六つは、煩惱の根拠ではあるが、同時にガンダルヴァの空中都市のような、夢や蜃気楼のようなものだと理解すべきである。（そのように見えるが、すべて空であり、実体ではないのである。）

9. 幻影のような人間 illusory person（幻人）の中にあつて
また映像 reflection（影像）のようなものの中にあつて
快と不快はいったいどのように
生じ得るといふのだろうか

9. 意識

そのように幻のような自己の中に、反射した映像でしかないようなものの中に生じたものであるのに、どうしたら実体としての快や不快が生じ得るといふのだろうか。（快や不快も空であり、実体性はないのである。）

10. 不快は快に依存すると
我々は表現する
快に依存することなくしては何も存在しないからである
すると快は了承できないものだということになる
11. 快は不快に依存すると
我々は表現する
不快に依存することなくしては何も存在しないだろうからである
すると不快は了承できないものだということになる

10. 11. 意識

快は不快に依存し、不快は快に依存している。不快なくして快はないだろうし、快なくして不快はないのである。（両者は対になって存在する、依存的な概念のカテゴリーに過ぎない。）ということは、快も不快も（実体的に存在するものとしては）了承できないものだということになる。

概念のカテゴリーは差異の網の目に過ぎない。相互に依存し合う体系であり、絶対点などは存在しないのである。これはソシュールが示した言語の特性に等しい理解である。

- 12. 快が存在しないというのに
どうして欲望が存在し得るだろうか
不快が存在しないというのに
どうして怒りが存在できようか

12. 意識

快が実体的な存在でないのに――ということはあなたがたにとってはまったく存在しないということであろうが――欲望（煩悩）が実体であるはずはない。（欲望は快であることを望むのであり、快を根拠としているものだったはずである。）また、不快が実体的な存在でないのに、それを元にして発生する怒り（煩悩）が実体として存在できるはずはない。

- 13. 空性の中には無常なるものは存在しないという理由から
もし「無常は不変／絶対 permanent（常住）である」と固執すること to grasp が
過ちであるのなら
そうした固執 grasping がどうして過ちであると言い得るのだろうか

13. 意識

空性ということをして「無常のものも存在しないことだ」と考え、それを根拠にして「無常は絶対的真理である」ととらえることが過ちだと言うなら、それが過ちだと言ったことになるのだろうか。

変化しないものは何もない、という原理こそが絶対的な真理であるとして、それに執着することは過ちであるが、それを「空性とは変化するものさえ究極的にはまったく存在しないことだ」と考えることから導き出してはいけない。空性とは「変化するものである」という原理であり、その原理も実体だというわけではない。究極的・絶対的な真理というものは実体と同じことを言っているのであり、そこには「空」も含まれなければ、「無常であること」も含まれないのである。究極的・絶対的な原理というものをつかまえようとしてはいけないとここでナーガールジュナは言っているわけである。

14. もし「無常は永遠（絶対）である」という見解に
固執するのが過ちであるなら
なぜ「空性においては無常なるものは何もない」
という見解に固執することも過ちにならないのだろうか

14. 意識

（あなたがたは）「空性とは、無常であるものも究極的にはまったく存在しないことである」などと主張しながら、「無常は絶対的真理である」ととらえることは過ちだということとは認める（のである）。後者が過ちなら、どうして前者も過ちにならないのだろうか。

15. それによって固執 grasping が存在するようになるもの、固執、
固執する主体、そして固執されたすべてのもの：
これらはすべて解き放たれて relieved（寂滅して）いる
ということは、固執は存在しないということである

15. 意識

実体として存在するととらえることの根拠、実体的にとらえること、実体的にとらえる当人、実体としてとらえられた対象物、こうしたものすべてが（実は実体的に）とらえられないものとして解き放たれている。つまり、実体としてとらえる執着も、（実体としては）存在していないということである。

16. 誤ったものとしてであれ、あるいはそうでないものとしてであれ
もし固執が存在しないなら
誰が過ちを犯す者であり得るのだろうか
誰が過ちを犯さない者なのであろうか

16. 意識

正しかろうと誤っていようと、「固執」というものが（実体として）存在していないなら、過ちを犯す者であれ犯さない者であれ、その「主体」も（実体として）存在しないのである。

17. 過ちの中にある者の中で
過ちが生じるのではない
過ちの中にない者の中で
過ちが生じるのではない

17. 意識

（実体的な）過ちが、それを犯す者の主体の内部で生じると言うことはできない。（輪廻するような有限の主体に依存して生じるのであれば、独立した実体としての過ちというものは考えられないはずである。）また、（実体的な）過ちが、過ちを犯して輪廻するようなことのない、実体的な主体の内部で生じるということもない。（過ちを犯さない者から過ちが生じてくるだろうか。結局どんなものであれ、実体的な過ちと、実体的な主体とは相互に必要とし合うことがないのである。）

18. 過ちは、その過ちが
起きている者の中で生じるのではない
誰の中で過ちが生じるというのだろうか
このことを自分自身の場合で検証してみるがよい！

18. 意識

(実体的な) 過ちは、それを犯している主体の中で生じることはない。(それならば、) 誰の中で(実体的な) 過ちが生じ得るといえるのだろうか。自分の場合で考えてみるべきである。

19. もし過ちが生じていないなら

いかにしてそれが存在として立ち現れるというのか

もし過ちが生じていないなら

いかにして人間 one が過ちの中に存在し得るといえるのか

19. 意識

もし(実体的な) 過ちがまだ生じていないなら(、それはまったく存在していないものだということになる。永遠にまったく存在していないものが)、どうやって存在となって現れてくることができるだろうか。もし(実体的な) 過ちがまだ生じていないなら(、まったく存在していない) そのような過ちを、人間はどうやって犯すことができるだろうか。

20. 実在 entity はそれ自身から生じるのではないのであり

その他のものからでもなく

その他のものとそれ自身(の両方) からでもない

(もし過ちが実在なら、) いかにして人間 one が過ちの中に存在し得るだろうか

20. 意識

実体というものは、自己を根拠に生じるということも、他のものに依存して生じるということもなく、自己自身と他のものとの両方を根拠にして生じるということもない。(もし過ちが実体なら何も根拠は必要ないのであり、それならば、) どうやったら(過ちの根拠であり主体である) 人間が過ちの中に位置を占められるのだろうか。(過ちが実体的に存在するなら、自己はまったく存在しないか、過ちとは無関係な実体として存在するかのいずれかだということになるだろう。)

これは次の詩の前提となる命題であるが、「過ち」が実体なら、その依存的根拠（主体）としての自己は必要なく、「自己」は存在しないか、過ちと無関係に実在する実体であるかになる、という意味である。そして自己が実体であるならば次の詩が導かれることになる：

21. もし自己（我）と、純粋なもの the pure（浄）、
永遠性（常）、そして幸福 the blissful（楽）が実在するなら
自己、純粋なもの、永遠性、
そして至福は、見せかけのもの deceptive（顛倒）ではないだろう

21. 意識

（そうすると、自己が実体的な存在だということはもはや過ちではないことになる。）もし自己や汚れのないもの、永遠性、（この世の）幸福などが実体として存在するのであれば、それらは真正のものであって見せかけだけの騙しでそう見えるというようなものではなく、過ちではないということになる。（しかし、もともと過ちとは、自己や汚れのないもの、永遠性、この世の幸福などが、本来は実体として存在しないのに、実体として存在するかのように見えることを言うのであったはずである。）

前の詩とは反対に、「自己」がもし実体なら、実体として自己を見るという過ちは存在せず、「過ち」は実体（絶対的真理）ではない、ということである。つまり実体的な過ち——過ちの原理が本質的に存在する——という考え方は矛盾を生むのである。これは、「絶対に永遠に間違っている、ということが絶対に永遠な真実である」と表現するような内部重複を犯してしまっているということであるし、そもそも、「何かについての過ち」ではなく、「過ちそれ自体」が単独存在していると言うことは奇妙だということである。

22. もし自己（我）と、純粹なもの（浄）、
永遠性（常）、そして幸福（楽）が存在しないなら
自己の非実在性 nonself（無我）、汚れたもの impure（不浄）、非永続性
impermanent（無常）、
そして苦しみ（苦）は、存在しないだろう

22. 意識

（もう一つの可能性として、）もし自己や汚れのないもの、永遠性、この世の幸福などが（実体的に存在しているのではなく、その反対として）まったく存在していないのであれば、（仏教教義の前提である）執着すべき永遠の自己が存在しないということもあり得ず、輪廻にあって汚れた状態も、事象の無常も、苦しみも、まったく存在しないということになるだろう。

「実体が存在しない」とナーガールジュナが言う場合、それはすべてのものが他の対象に依存して存在していると言うことであり、依存的でない存在はない。つまり何ごとにも依存しない絶対的真理が存在しないということと同じである。そしてそう主張しているナーガールジュナ自身の主張も、絶対的真理ではない。いくら正しい認識といっても、誤った認識と比較しての話であり、単独で正しいということはないのである。

23. このように、過ち（顛倒）の消滅 cessation によって
無知 ignorance（無明）が消滅する
無知が消滅するとき
部分と原因で構築されたもの compounded phenomena（有為／諸行）などもまた消滅する

23. 意識

このように、過ちというものが（実体ではない結果、実体論者の結論として、）まったく存在しないものだという事になると、人を輪廻に縛りつけている無知もまた、まったく存在しないものだという事になってしまう。そして無知がまったく存在しないなら、部分によって構成され、因果関係という原理によって構築された概念的世界である現象界

そのものが（、つまり我々が日常的に認識する世界が）、消滅し、まったく存在しないものになってしまうのである。

ここでは現象世界の原理がすべて概念的認識によっており、実体ではない依存的なものであるということが強調されている。過ちが消滅すると現象界も消滅する、ということの意味は、「過ちである実体的認識を論理的主張として撤回すると、現象界がまったく存在しなくなる」という意味ではない。また、「過ちである実体的認識をやめられる実践的（瞑想的）境地に至れば輪廻から解脱し、現象界に縛りつけられることがなくなる」という仏教の教えは本当だとしても、そういう意味で「構築されたものが消滅する」と言っているわけでもない。ここではそういった形而上学的な問題が論じられているのではなく、過ちも現象世界も、依存的にしか存在しないということが強調されているのである。この最後の形而上学的—仏教救済論的解釈は、23. の詩だけを字面で追っているとそのように読めてくるのだが、前後の詩の文脈から考えるとここでは当たっていないことが理解できるはずである。

24. もし誰かの煩惱が

彼の本質によって存在するなら

どうやってそれらを放棄し得るであろうか

誰がその存在を放棄できるであろうか

24. 意識

もし、我々を輪廻の世界に縛りつけている煩惱というものが、我々自身の本質によって存在するような実体なら、（永久にその性質を変えることのない）それら煩惱を捨て去ることは永遠にできないはずである。誰が捨て去れるというのだろうか。

煩惱や過ちが実体なら、ブッダの基本的な教えである「解脱」は不可能なものだということになるのである。

25. もし誰かの煩悩が
彼の本質によって存在しているのでないなら
どうやってそれらを放棄し得るであろうか
誰がその非存在 nonexistent を放棄できるであろうか

25. 意識

反対に、もし、我々を輪廻の世界に縛りつけている煩悩というものが、我々自身の本質によって存在するような実体ではないのなら、（あなたがた実体論者にとって実体の否定は「まったく存在しないもの」を意味するわけなので、）やはりそれら煩悩を捨て去ることはできないはずである。誰が「まったく存在しないもの」を捨てられるというのだろうか。